「イスラームと教育」部会セッション報告

アラブ・トルコ・タタール–青年トルコ革命のメディアと政治

藤波伸嘉（東京大学）

2012年10月28日日曜日、青山学院大学で開催された比較教育社会史研究会2012 年秋季例会「イスラームと教育」部会において、私は、「「アラブ人とトルコ人」－青年トルコ革命のメディア、政治、ナショナリズム」という表題で発表を行なった。以下に簡単にその報告をさせていただきたく思う。

今回の発表は、1910年3月から4月にかけ帝都イスタンブルで生じた「アラブ侮辱」の筆禍事件を素材に、20世紀初頭オスマン帝国の政治、出版、思想の相互関係を論ずるというものだった。だがそもそも、事前にお伝えしていた表題は「アラブ・トルコ・タタール－青年トルコ革命のメディアと政治」だったから、表題自体が変わっている。主題から「タタール」が抜け、副題に「ナショナリズム」が加わることになった。今回の報告において、本来は「研究史上の空白を一次史料によって実証的に埋める」のではなく、寧ろ「既存の研究を小気味よく」「まとめること」に力点を置くことが求められていたのだが、実際に報告を準備する段になると、どうしても一次史料にひきずられてしまい、その結果、「アラブ人とトルコ人」のパートについて読んだ史料を報告するので手一杯になってしまって、タタール人の登場まで話が進まなかった。それだけではない。元来の構想は、第一に

カザン・オレンブルクを中心とするタタール語紙とイスタンブルのトルコ人との関係、第二にシリア、エジプト、イスタンブルを往来するアラブ出版人の動向、そして第三にアテネ、サロニカ、イズミル、イスタンブルを繋ぐギリシア人の人的・知的流動性を提示し、その上でこれら三つのネットワーク全ての結節点としてのイスタンブルが有した特異性を、オスマン内外の政治史的・思想史的文脈の中に位置付けるというものだった。だが今回の発表では、その文脈における個別具体的な論点としてのトルコ及びアラブの民族意識（並びに「イスラーム改革思想」）と舞台としてのオスマンの出版法制とに話が集中し、「接続する帝国、交錯するネットワーク」という本来与えられていたテーマからはやや外れる結果となってしまった。幸いにして、その内容自体はオスマン史研究者にはそれなりに喜んでもらえたようだったが、他の報告者も含めた部会及び研究会の全体像の中での位置付けについては課題が残ったと反省している。なお質疑に際しては、当時の主要紙の部数や識字率、多言語間の相互引用の具体的方法、帝都から全国各地に新聞が物理的に到着するまでにかかる時間、「アラブ侮辱」と「タタール侮辱」をめぐる政治過程の異同などの点が話題となった。

ともあれ、近代帝国の一つとしてのオスマンが同時代の他の諸帝国とどのような点で異なっていたかを理解するためには、社会史や教育史、更にはメディア史や政治史といった、方法論を軸とした比較は必須の作業であろう。この研究会でも、今後はそうした点をめぐる議論が活発になされることを期待したい。